

〈書評〉

早稲田教育叢書 6

堀切実編『おくのほそ道』と古典教育

佐藤 勝 明

独自の鋭い視点と学際的な幅広い視野とにより、近世文学研究の第一線で活躍される堀切実氏は、『おくのほそ道』に關しても、新鮮な読みや刺激的な指摘をすでに数多く示されており、たとえば、『おくのほそ道』序章の漂泊観（『俳道』富士見書房 平成2年）や『おくのほそ道』を連句的に読む（『芭蕉の音風景』ペリカン社 平成10年）などの諸論考、NHKラジオ（文化セミナー・江戸文芸をよむ）での放送内容をもとにした『おくのほそ道 永遠の文学空間』（NHK出版 平成9年刊）、大学生へのアンケートをもとに問題点を論じた『おくのほそ道』をよむ（『岩波ブックレット 平成5年』）などが、ただちに想起される。本書は、そのような成果の上に、『おくのほそ道』は、日本を代表する古典文学としてどのように評価されるべきなのか、また、『おくのほそ道』は、これまでほんとうのところ、どのように読まれてきたのか（『まえがき』）という課題に答えるべく、本作品と国語教育との切り結ぶ地平を追究して編まれた、きわめて真摯でユニークで重要な一冊である。まず、早稲田教育叢書の6にあたる本書の構成を掲げてみよう。

第一章 I 国語教科書にみる『おくのほそ道』

堀切実・藤原マリ子

II 『おくのほそ道』教育史——その指導法の変遷——

藤原マリ子

第二章 I 教材としての『おくのほそ道』

——主題・構成・叙述・文体—— 堀切実

II 教材『おくのほそ道』の本文表記に關する考察

——仮名遣いを中心に—— 藤原マリ子

第三章 I イメージ世代のみた『おくのほそ道』

——アンケートによる作品享受の分析1——

堀切実

II 『おくのほそ道』各章段の評価

——アンケートによる作品享受の分析2——

堀切実

第四章 I 『おくのほそ道』の主題と構成

——大学生における享受のしかた—— 堀切実

II 高校生と『おくのほそ道』

内野勝裕

第五章 英訳で読む『奥の細道』

——アメリカの日本文学研究の立場から——

シェーロ・クラウリー

第一章は、中等教育（中学校・高等学校）における本作品の扱われ方の調査・分析を通して、その古典化の経緯をさぐろうとしたもの。Iでは、明治以降の中等国語教科書における本作品の採

録状況をていねいにたどった上で、『おくのほそ道』の採録状況の変遷は、まさに、多様な読みの成立を反映した古典化の歴史であった：（中略）……こうした古典的特質をいかに活かしていくかが『おくのほそ道』の新たな古典化の道を切り拓く上で鍵となるう」として、「文章の表現や調べ自体を楽しむ指導」「いくつかの章段の連続性を生かして採録する配慮」「曾良本に拠ること」の三つを提言する。とくに二つめの提言は、現在の教科書で完全に欠落している点であり、古典の授業の活性化のために、きわめて重要な指摘である。Ⅱでは、教科書の「学習の手引き」や教師用指導書をもとに、戦前・戦後における指導の内容及方法の実態が、構成・表現・内容・採録趣旨の諸点からていねいにたどられており、これも教えられるところが多い。とくに、「戦後の単元構成は文学ジャンル・時代・古典（古文）等によってまとめられた至極あつさりしたものである」のに対して、「戦前の教科書の多くが、実は周到な編纂方針のもとに有機的に関連づけられ排列されていることが明らかである」との指摘は、今後の教材選定のために大きな示唆を与えるものであり、「展開の妙や作品全体の構成への関心を喚起する工夫は、イメーシ世代の高校生にも有効であろう」との提言も説得力がある。なお、巻末には、「戦前期『おくのほそ道』採録教科書一覽」も付されており、教科書・指導書を網羅的に調査された藤原氏の努力に、心より敬意を表したいと思う。

その藤原氏は、すでに『おくのほそ道』の仮名遣い（『解釈』平成9・11・12）などで、従来は旧仮名遣いに合致しないことを

もとに、誤謬が多いとされてきた本作品の仮名遣いが、実は定家仮名遣いに拠りつつ、同時に近世の活用形の形はそのまま用いるといった、芭蕉の規範意識を反映していることを明らかにされ、学界に大きな一石を投じている。第二章のⅡは、その成果を利用し、戦前・戦後の教科書において、本作品の表記がどう扱われてきたかを論じたものである。その結果、「教科書では底本の本文が原則として全て旧仮名遣いに変更されている」ことが明らかにされ、その上で、「独自の規範を有する『おくのほそ道』の仮名遣いに直接触れさせることの意義が改めて検討されてよいのではないか」との提言がされている。旧仮名遣いに慣れるだけでも四苦八苦の生徒たちを、いたずらに混乱させるだけではないか、との声も聞こえてきそうだが、「ことばの変化を実感させ、ことばの歴史やことば自体への興味・関心を喚起させる」との視点は重要であり、いずれにせよ、俳諧研究者の側からも、国語教育に関わる側からも、真剣に議論されてしかるべき問題であることは間違いない。

第二章のⅠは、堀切氏がこれまでの研究成果をもとに、本作品の教材化のあり方を論じたもので、教材として選択する際の基準をさぐるべく、本作品の文学的特徴を、「意味の焦点（あるいは中心的理念）の種々相とその移行のしかた」「文学空間の形成」「文体的変化」「地の文と挿入句」の四つの観点から検証した上で、章段ごとの分析結果を一覧表にしている（章段は岩波文庫本のそれに従っている）。その結果、「多面的な特色の著しい章段」の「ほとんどが現行教科書教材として採択率の高いものであること」が

明らかにしたものの、なお「再検討の余地はある」こと、「幾つかの章段を生かして採録することが必要になる」ことも指摘されており、傾聴すべきと思われる。また、「中学校での『おくのほそ道』の扱いに関しては、この作品が内容・表現ともかなり高度なものであるだけに、さらに一考を要するのではないか」との疑念や、『曽良旅日記』との照合に焦点を当てること、教材研究は放棄すべき」との提言なども、大いに共感すべきものである。ところで、本稿における堀切氏の認識と密接につながるのが、第三章のⅠ・Ⅱと第四章のⅠであり、これらは、大学の演習に参加した学生へのアンケートやレポートの分析をもとにしている点で、きわめてユニークで興味深いものといえる。具体的には、『おくのほそ道』——そこがもしろい』『芭蕉——そこが好き』のアンケート（平成四年度実施）をもとにした三のⅠ（『おくのほそ道』——そこがつまらない』『芭蕉——そこが嫌い』のアンケート）をもとにした、前掲の『おくのほそ道』をよむ』と比較しつつ読むのもよいであろう、「好きな章段、嫌いな章段をそれぞれ三つずつあげ：（中略）：理由をコメントしなさい」というアンケート（平成五年度実施）をもとにした三のⅡ、作品の構成についての感想・意見を書かせ、シンボジウム形式で総括し（平成八年度実施）、また、作品の主題について同様にを行った（平成九年度実施）ことをもとにした四のⅠ、ということになる。残念ながら、個々について論評する紙幅の余裕をもたないが、これらが第一章のⅠにおける論点を支え、その説得力を強める効果を發揮していることは明らかであり、研究と教育とを切り離さず、学

生の反応にも真摯に対応し、つねに授業の工夫を怠らない氏の姿勢に、強く心を打たれる。「古典文学を、まさに古典として扱うには、たとえ教材が抄録スタイルになっていたとしても、教授者には、その作品全体への見通し、つまり主題・構成への展望が不可欠となる」との言は、全教員に向けて発信された、まさに至言といつてよからう。

このように、本書から学びうることは多く、私自身、多くの示唆を受け、感銘をもって読了した。中には、「より具体的な授業案も……」と求める向きがあるかもしれないが、それは各自が考えるべきことであり、最も大切なことは、本書をきっかけに、私たちがそれぞれ『おくのほそ道』を読み直し、あるいは、その授業のあり方を考え直していくことであろう。その意味で、高校での授業展開と生徒へのアンケート結果を報告された第四章のⅡも、英訳本での授業経験を踏まえた第五章も、示唆的である。ともあれ、本書は、教育と研究の切り結ぶ地平の可能性を示し、読者に新たな模索を始める意欲を起こさせてくれるのであり、その点でも、重要で稀有な一冊といえるのである。

（一九九八年一〇月一日 学文社 一二二ページ 一八〇〇円）

（和洋女子大学）